

# 学生による企画展の報告

## 「バンカラ寮生類～金大寮史 124 年～」

A Report on the Special Exhibition  
by Students at Kanazawa University Museum in 2017,  
“BANKARA-RYOUSEIRUI:  
History of Student’s Dormitory of Kanazawa University for 124 years”

鈴木彩可(1)、米田結華(1)、室谷颯花(1)、北澤怜子(2)、笠原健司(3)、菅原裕文(4)、河合望(5)

Ayaka SUZUKI, Yuika YONADA, Soyoka MUROTANI, Reiko KITAZAWA,  
Kenji KASAHARA, Hirofumi SUGAWARA, Nozomu KAWAI

(1)金沢大学大学院 人間社会環境研究科 博士前期課程

(2)金沢大学大学院 自然科学研究科 博士前期課程

(3)金沢大学 情報部情報企画課総務係 職員

(4)金沢大学 人間社会研究域 歴史言語文化学系

(5)金沢大学 新学術創成研究機構 金沢大学資料館副館長

### 1. 博物館実習と学生による企画展

金沢大学では、2014年度以来博物館学芸員養成課程科目「博物館実習」の一環として学生による企画展を開催してきた。文部科学省による博物館実習ガイドライン（2009年度版）では2単位相当の学内実習、1単位相当の館園実習が推奨されている。本学付属の資料館は2016年4月に北陸地方の高等教育機関では初めて博物館相当施設に指定されたが、資料館において開催された学生企画展は、館園実習ではなく、学内実習の一環として位置付けている。

金沢大学資料館は、1989年4月1日の開館より2019年4月1日で30周年を迎える。創設以来博物館学芸員養成課程への協力と連携が行われてきたが<sup>i</sup>、2014年度に学生による企画展が開始された<sup>ii</sup>。大学博物館の重要な役割の1つとして、学生教育の場としての役割があり、それを「博物館実習」の授業に組み込ませたのが、学生による企画展である<sup>iii</sup>。本学初の学生企画展は、「学生が贈る、企画展示。植物図館」であった。緑豊かな金沢大学角間キャンパスにちなんで、植物をテーマにした展示であった。2015年度の企画展は「破かれた恋愛小説～『寒潮』に翻弄された四高生～」である。『寒潮』とは菊池幽芳（1870～1947年）が1908年（明治41年）より大阪毎日新聞で連載した恋愛小説で、主人公は金沢大学の前身校、第四高等学校（以下、四高）の学生がモデルとされ、同展示会は同小説に着想を得た。文書資料の展示のみならず、視覚に訴える資料展示は、好評を博した<sup>iv</sup>。2016年度の企画展は、「ハカリモノー文系学生が紹介する科学実験機器ー」は、加賀藩政

期から明治時代にかけて製作され、本学が継承してきた科学実験機器を、文系学生ならではの視点により解説した文理融合的な企画展示であった。

本稿で紹介する2017年度の企画展「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」は、2017年3月に老朽化などを理由に50年近い歴史に幕を下ろした「北溟寮」に加え、四高時代に存在していた「時習寮」と「三々塾」の3つの寮を中心に、寮生たちの生活ぶりや独立自治の精神、バンカラ気質について紹介した内容である。会期は2017年11月29日から2018年3月16日までであった。

本稿は同企画展が開催されるまでのプロセスを、2017年度の実習生、資料館学芸員、および授業担当教員が振り返って事後評価を行うことを目的とする。なお、本企画展は、2019年1月から2月にかけて金沢大学資料館のアウトリーチ展として若干模様替えされた形で金沢市内の石川四高記念文化交流館にて展示された。

まず、2017年度の「博物館実習」のスケジュールについて言及する。4月の段階では金沢大学資料館の学芸員による展示説明があり、企画展の役割分担が決められた。そして、2016年度から導入されたソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下、SNS）にて関係者以外の閲覧ができないクローズド・コミュニティーを形成した。また、急を要する連絡などで、班内外での横の連携を比較的円滑にするために別のSNSを活用した。そして、企画展のコンセプトを決めるためにブレインストーミングが行われた。5月には企画展のテーマが決まり、「三々塾」に寮誌である「三々塾誌」の解説作業が行われた。また同月から6月にかけて複数にわたって3月に閉鎖された「北溟寮」のフィールドワークが実施された。フィールドワークは学生企画展初の試みであり、自ら「北溟寮」の「廃墟」に赴き、そのままにしておけば廃棄される運命にあった残された資料の救済および調査を行い、多くの貴重な資料を獲得することができた。2017年度は、学生の企画展に加え、学校教育学類の美術教育専修の同窓展「Acanthus Ars 2017」の企画も行った。その準備は6月に開始し、10月まで実施した。これらの企画展および美術教育専修同窓展の準備と並行して、学内実習と館園実習に必要な知識と技術の習得と訓練に時間を費やした。つまり、考古資料や美術資料の取り扱いや展示方法など、資料実物に触れつつ実技を学んだ。本格的に企画展の準備作業が開始されたのは7月からであり、同月に展示班・資料班・キャプション班の3班による合同班が結成された。そして、企画展のための資料の選定、展示案についての考察を行い、資料リスト及び展示案が作成された。そして、8～9月に夏季休業を挟み、10月から同窓展が開始され、11月末に企画展を開催するというタイトなスケジュールであった。

本稿では、まず第1章にて、「博物館実習」科目における学生企画展の位置付け、過去の企画展の概要、今年度の「博物館実習」における学生企画展のスケジュールの概要、教員として実習に関わる際に試みた、あるいは留意した点について河合と菅原が説明する。第2章にてテーマとタイトルの決定を中心に企画展全体の流れを室谷が概観する。第3章では、鈴木が展示資料の選定と調査について、第4章では米田が展示室の構成と設営について、それぞれ執筆を担当する。第5章では、北澤、室谷、鈴木が教育普及活動と各種イベントの企画を振り返る。本稿末尾では学芸員の笠原が結論も兼ねて全体を総括し、大学付属の資料館で学生による企画展を行う意義について考察する。

本章では、教員として実習に関わる際に試みた、あるいは留意した点を記すに留めたい。第一に学生の能動的な活動を確保するためアクティブ・ラーニング方式を採用した。これまでの企画展もアクティブ・ラーニングの要素が強かった点に着目し、教員はこれをシステムティックな形でブラッシュアップすることに専念したのである。2017年度の実習生は30名であり、これを企画・資料・展示・デザインの4班に編成した。毎週の授業では「前週までの振り返り（15分）→議論・作

業（120分）→議論・作業の報告（15分）」というサイクルを繰り返し、学生が主体的に学習できるよう、各教員は担当する班のアドバイザーや全体のオブザーバーの立場に徹した。この方式に促され、学生は問題解決能力・調査能力・ディスカッション能力はもとより、コミュニケーション能力までもが飛躍的に向上したと思われる。

二点目は、班体制と役割分掌を徹底したことである。実習生は先述のように30人4班編成である。各人が担当する業務の進捗は各班リーダーにより把握され、各班の議論・作業の進捗は全体リーダーによりマネジメントされる。企画展オープニングまでのタイト・スケジュールが学生の焦りに拍車をかけたことも否めないが、展示までの準備期間を通じて学生の主体性と責任感において著しい成長が見られた。

すでに前述したが、教員、資料館学芸員、学生同士の情報の共有と連絡のために2016年度より複数のSNSを導入したが、2017年度も同様に導入し、非常に効果的であった。

本学において博物館実習を受講するには原則として実習以外の博物館関係科目を全て修得していることが条件となっているため、必然的に実習生の大半が4年生になる。そのため、実習生は就職活動や教育実習、学芸員の館園実習、そして卒業論文という学生生活の大きな山場に直面することになる。また博物館実習を終えたとしても、学芸員として採用される学生はごく稀である。こうした超人的な忙しさや採用条件の厳しさにもかかわらず、博物館実習の受講生は企画展を実施した。学生たちは企画展を通じて、座学では学ぶことのできない実践的な博物館学芸員の仕事を体得できただけでなく、人格的成長も育むことができたと言っても過言ではない、本稿が大学博物館の重要な役割である教育の場の実践の事例の一つとして読者に僅かながらでも参考にしていただければ望外の喜びである。

(河合・菅原)

## 2. 学生企画展の流れ

本章では学生企画展「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」のテーマ選択と準備作業、企画展開催後の成果について述べる。その中でも特に、企画展のテーマとコンセプトの決定に至る経緯と、学生が班ごとに行った活動日程を詳述し、展示資料の調査、展示室の構成と展示作業、関連企画等の実施に関しては、次章以降に譲る。

### (1) 学生企画展に向けた班設定

新学期開始とともに博物館実習の講義も開講となり、初回となった2017年4月13日に学生企画展に向けた班割りとは役割の振り分けが行われた。昨年度の活動の様子などを考慮した上で、教員の指示により5つの班を設置することとなった。展示計画から実際の設置作業を行う展示班、展示資料の調査・選別を行う資料班、パネルやキャプションの文章作成を行うキャプション班、ポスターやパネルなどのイメージ製作を行うデザイン班、外部との連絡を行う渉外班である。学生の所属・専攻は関係なく、学生当人の希望により各班に6名が割り振られた。ただし、デザイン班のみIllustrator等グラフィックソフトの使用に慣れた者がいる場合はそちらへ優先的に配属した。各班からは1名ずつ班リーダーを選出し、加えて、全ての班を束ねる役目として全体リーダー1名、全体副リーダー2名が班員と兼任する形で選ばれた。テーマ決定から展示計画が確定するまでは展示班・資料班・キャプション班が作業の性質から合同班として動く期間があったが、それについては

(3) で後述する。

## (2) 学生企画展のテーマとコンセプトの決定に至るまで

学生企画展では、金沢大学資料館の収蔵資料を用いた展示を行うことが原則である。4月20日に行われた第一回目の話し合いでは、資料館がヴァーチャル・ミュージアム・プロジェクトとして公開している様々な収蔵資料を実習生全員で閲覧しながら、テーマの方向性について班ごとで話し合った。この時参考にしたのは、直近の学生企画展である。過去3年に博物館実習生により企画された展覧会の主題は、「植物」「恋愛小説」「科学実験器具」といったものであり、これらとある程度差別化が図れるものが望ましいとされた。班ごとで意見をまとめ発表に移ると、植物・実験器具を題材にした自然科学系や恋愛小説を題材にした文学系を思わせる過去の展示に配慮してか医学系資料を使った案が挙がった。他に目立った意見が「四高生の暮らし」「年中行事」「学生生活・行事・料理・メディア時代別比較」「加賀藩の女性のライフイベント」など身近な事柄や日々の営みを取り扱おうというものであった。

展覧会としてよりまとまった案を出し合った5月1日の第二回の話し合いでは、「四高生の暮らし（学内外問わず生活を再現）」「金大生の衣食住（寮生活）」「学生の暮らし（学生の平日と休日）」といった学生の日常を取り上げる意見が挙がった。ここで資料館学芸員に実現可能性について判断を仰ぎ、「学生生活」に関する先述の3案を組み合わせるのが良いとのアドバイスをもらった。この時点で、医学や女性の生涯を扱う案は除外となった。次に、学生生活に着目した3案の中でも「寮生活」は具体性もあり企画としての軸が明確であるため、寮生活という主題に据える構想が初めて出たのもこの日の会議であった。この話し合いが行われた日からわずか1ヶ月ほど前に、金沢大学の男子寮として半世紀近い歴史を持つ北濱寮が閉鎖となったことから、大学の寮制度の転換期や節目となりうるこのタイミングでその軌跡を形として残すことは非常に有意義なことになるのではないかと思われた。

「寮生活」をテーマとして絞ることが決まり準備活動が進んだ8月上旬、夏季休業に入る前に改めて学生企画展名を決定することとなった。学生から数多くの案が上がる中、学生の多数決や教職員の意見も仰いだ上で、印象的であった単語を組み合わせる「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」と決まった。「バンカラ」は金沢大学が第四高等学校だった時代に四高生の気風を象徴する単語であった。対して「寮生類」は、今回の学生企画展に取り組んだ学生による造語である。学校と寮という異なる環境で学生生活を過ごした寮生たちと、水中と陸上という2つの生息域を同時に持つ生物の総称である両生類を掛詞にして編み出された。

## (3) 各班の準備活動及び企画展の成果

今回の博物館実習履修者が30名と比較的大人数であったため、人員のスケジュールを合わせることや情報を正確に共有することは常に注意して行う必要があった。ソーシャルネットワーキングサービスを利用して連絡や呼びかけを行ったり、Webクラウド上のファイル共有サービスを活用したりすることで円滑に進めて行った。

多岐にわたる準備業務は各班・各自が連絡を取り合いながら通常学業の合間を縫って取り組み、毎週木曜日午前9時半から12時までの博物館実習の講義時間は学生全員が集まる場として様々な報告や意見交換の機会として活用した。さらに、各班リーダーに全体リーダーと全体副リーダーを加えた8名で「リーダー会」と称する集まりも定期的に行った。大抵の場合、毎週の講義のあと午

後に召集され、講義時間内で済ませられなかった班同士の意見交換をリーダーが代表する形で行ったり、重要事項の確認や大人数ではまとめにくい案件を話し合ったりする代議員会のようなものであった。

(1) で述べた通り、学生の班分けは第一回講義の4月13日の時点で行われていたが、具体的に班ごとの業務に着手したのは企画展テーマが決定した5月に入ってからであった。上記で班同士の連携の重要性を強く主張したことからもわかるように、今回分けられた班で動くには工夫が必要であった。まず、5月から7月にかけて展示班・資料班・キャプション班の3班が合同班として共同で活動せざるを得なくなった。これは、「展示資料が決まらなければ詳細な展示案を設計できない」「展示テーマが分からなければ資料選別がしにくい」「展示資料の詳細が分からなければキャプションの内容を決めづらい」というふうに、3班が行動に移りにくい状態になってしまったためである。特に、初期は資料班の負担が非常に大きかったため、合同3班で主に資料に目を通し、展示計画に照らし合わせながら資料を選別していくという形をとった。同様に、デザイン班もパネル展示の計画が決定しないと挿絵などの制作に取り掛かることができなかったが、挿絵に登場するキャラクターの設定図や、作風がコメディタッチなのか、あるいはシリアスタッチなのかといった初期の細かいイメージの確認を小まめに全体に対して行うことで、後の制作に支障が出ないよう努めた。

次に、渉外班という役職はあまり活用しきれなかった。北溟OBへの直接の聞き取り調査やアンケートの実施、他大学など外部とのコンタクトを取るなどはもちろんあった。しかしながら、他の班が渉外業務を必要としている場合にわざわざ渉外班を挟まなくとも直接連絡した方がスムーズな場面などもあり、渉外係としての立ち位置が曖昧になってしまった。全期間を通して他班より本来の業務が少なかったため、北溟寮から新たに持ち帰った資料の洗浄やリスト化、寮生のエピソード集の書き出しとスライドデータの作製、教育普及活動の実施など人出の足りない業務を請け負うことが多かった。

このように、準備活動が始まった最初の頃は手探りで行うような部分もあったが、徐々に一体感を持って取り組むことができ、無事に11月27日の会期初日を迎えることができた。67日の会期中の来場者は、のべ2062名であった。

#### (4) 評価

まず、準備活動進行に関しては概ね計画・順序立てて遂行することができた。前年度の学生企画展では、実際の活動開始が夏休み以降となり初動が遅れてしまったことが反省点であったとのことを受け、当年度は4月から準備活動を迅速に進めるよう努めることができた。4月から6月にかけて学生の大半を占める4年生の一部が就職活動のため欠席しがちになってしまう時期もあったが、全体の人数が多かったことに加え、就職活動のない3年生が8名含まれていたことが助けとなった。

次に、班別の活動については、反省すべき点は(3)で述べた通りである。準備活動の進行段階や班によって作業量の偏りが出てしまったことは事実だ。とは言え、合同班の組織や作業負担の少ない班に業務を分散するなど補完し合うなど、上手く調整して活動することができた。このような臨機応変な対応ができたのは学生全員の協力姿勢があったことは言うまでもないが、リーダー会の存在が功を奏したように感じられる。全体が同じ方向に向かっているか、他班がどのような状況にあるかといった確認を話がまとまりやすい少人数で行うことで、大人数のチームでも効率的に準備活動に当たることができた。仮に今回の準備活動を是正するのであれば、以下のような例が提案できる。企画展テーマを確定した後はゆとりのある人数で初期の資料調査にあたり、「展示に使用でき

る資料はどのようなものがあるのか」という大筋が決まってから、展示計画を設計する班と資料の詳細な調査をする班、加えてその他のキャプション制作やコンピュータグラフィックスを製作する班に分かれれば、円滑に班別行動に移れたように思う。まだ具体的な業務が始まる段階から、それぞれの班が「自分たちの班が今後どのような作業を行うことが予想されるか」ということを想定して意見を出し合うことができたので、あらかじめ配属を決めて置いたことは良かった点だが、膨大な収蔵資料の概見はできるだけ多くの人員で行うべきだったように思われる。後に班の組織を準備活動の進行の様子見しながら柔軟に変化させても構わないだろう。

最後に、今回の学生企画展は博物館学芸員を志す学生たちにとって貴重な経験となった。中でも、県への譲渡を待っていた閉鎖後の北溟寮に入ることができたため、つい昨年まで実際に使用されていたものを展示資料として使えたことや、自分たちの手で資料を搜索して持ち帰り、それらを展示するという体験ができたことは特殊な例だったのではないだろうか。今後も、主体的なアイデアや工夫で、学生だからこそできる企画展が生み出されることを願う。

(室谷)

表1 班割りと学生の内訳

班	学類	コース	学年	備考
展 示	人文	考古学	4	
	人文	フィールド文化学	4	
	人文	考古学	4	班リーダー
	人文	フィールド文化学	4	全体副リーダー
	人文	フィールド文化学	4	
	人文	フィールド文化学	4	
資 料	国際	国際社会	4	
	人文	フィールド文化学	4	班リーダー
	人文	フィールド文化学	4	
	人文	考古学	3	
	人文	フィールド文化学	4	
	人文	考古学	3	
キャプション	人文	フィールド文化学	3	
	数物科	物理学	4	
	人文	フィールド文化学	4	班リーダー
	人文	地理学	3	
	人文	西洋史学	3	
	人文	日本文学	4	
デザイン	人文	フィールド文化学	4	
	人文	フィールド文化学	4	全体副リーダー
	人文	フィールド文化学	4	
	人文	フィールド文化学	3	
	人文	考古学	4	班リーダー
	人文	心理学	4	
渉 外	人文	考古学	3	班リーダー
	人文	考古学	4	

学生による企画展の報告「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」

渉外	地域創造	環境共生	4	
	国際	ヨーロッパ	4	全体リーダー
	人文	考古学	3	
	人文	フィールド文化学	4	

表2 各班の活動日程

月	日	展示班	資料班	キャプション班	デザイン班	渉外班
4	20	主題案の出し合い				
5	1	主題の決定				
	11	構成の思案				
	18	北浜寮調査（第一回）、構成の思案、三々塾誌の読込				
	25	展示ストーリーの思案、北浜寮調査（第二回） 北浜寮調査（第三回）				
6	1	初期企画書提示、展示内容詳細の具体例思案				
	8	展示計画の決定、 テーマ確認	資料調査開始		各々切設定、ビジュアルに関する共有イメージ確認のためのアンケート作成	クラウドサービス共有アカウントの作成、北浜OBへの聞き取り調査準備開始
	15	展示を4つのテーマで分類することを決定			完成イメージの方向性を確定	北浜OBへのアンケート内容制作
	22	四高記念館見学				
	28				班内各員作業分担決定	
	12				北浜寮調査（壁の落書き撮影）	
8	3	企画展タイトル決定				
9	16	夏季休業期間中リーダー会				
10	11	壁面落書き、資料配置詳細決定				エピソード展示制作開始
	12		マッピング調査開始			
	18		範囲・内容確定			怪談会準備開始
	19		マッピング調査終了			
	31	マップ試し刷り				
11	1				ポスター・チラシ入稿	
	16			パネル印刷	パネル印刷	怪談会初回リハーサル
	20	展示ケース確認		パネル貼り	パネル印刷	エピソード集試運転
	21			校正		
	22	マップ印刷		パネル貼り	パネル印刷	パンフレット発送
	24	什器移動、搬入作業打ち合わせ		パネル貼り		
	27	展示作業				

月	日	展示班	資料班	キャプション班	デザイン班	渉外班
	28	確認、照明調整				
	29	会期初日、取材対応 (HAB北陸朝日放送、北國新聞)				
	30	取材対応 (北陸中日新聞)				
12	8	取材対応 (金沢大学広報室)				
	27	見学対応 (滋賀県立虎姫高等学校)				
1	15	ミュージアム・ツアー				
	16	ミュージアム・ツアー				怪談会
	17	ミュージアム・ツアー				
	18					怪談会
	24	ミュージアム・ツアー				
	25	ミュージアム・ツアー				
	26	ミュージアム・ツアー				
2	1	報告書提出				
3	16	見学対応 (北溟寮OB)				
	19	撤収				

### 3. 資料調査と展示資料の選定について

本章では、本企画展の展示資料を概観した後、平成28年度末に閉寮した北溟寮における3回の調査と展示資料選定に関して述べていく。

#### (1) 展示資料の概観

金沢大学の前身校である第四高等学校には、本企画展で取り上げた三々塾、時習寮をはじめとする多くの寮が存在した。金沢大学資料館には金沢大学前身校である第四高等学校時代の資料が多く残されており、寮に関する資料も多数散見される。特に、『三々塾誌』には、キノコ狩りやタケノコ狩り、餅つきといった寮でのイベントの様子やありふれた日常でのできごと、去寮に際しての思いなどが赤裸々に語られ、当時の寮生活を垣間見ることができ大変興味深い。また、金沢大学図書館にも『時習寮報』『寮務日誌』『寮委員日誌』といった文書資料が多く所蔵され、寮生活や寮における自治のあり方が窺える。

また、平成28年度末に閉寮した北溟寮には、平成29年5月に実習生が3回にわたる調査を行った。閉寮直後の北溟寮には、寮生の私物や自治、寮運営、寮祭などに関する文書資料が多数残されており、北溟寮の賑わいや寮生の勢いを感じることができた。

本企画展が平成28年度北溟寮閉鎖に端を発していること、また石川四高記念文化交流館における寮の展示との差別化をはかる目的から、自作の辞寮詩が記された扉、北溟寮閉寮の際の“鬼ごっこ”の告知や三々塾誌や時習寮報における退寮の思いなど、導入部分に「終わり」に関する資料を展示した。企画展の核となる展示には、第四高等学校や金沢大学の学生自治の行われていた主な寮である三々塾、時習寮、北溟寮の3つの寮を選び、「自治・規則・日常」「独自文化」「祭り」という寮生活をより深く知ることのできる3つのトピックに沿った資料を選定した。「自治・規則・日常」では、寮における自治や規則が明白にわかる文書資料や、寮生活を写した写真、学生服、制帽など

を展示し、寮生たちの日常風景を提示した。「独自文化」では、それぞれの寮の特色あるイベントや文化について言及した。特に、時習寮で入寮の際行われた“怪談会”と呼ばれる上級生からの洗礼イベントは、多くの文書資料に登場し当時から注目を集めたイベントであったことが伺える。今回は怪談会で使用された台本を展示した。「祭り」では、一大イベントであった寮祭を取り上げた。寮ごとに特色ある寮祭を行っており、太鼓や紋付き袴、はっぴや寮祭で使用された看板など、その時の様子が分かる資料とともに展示を行った。

## (2) 北溟寮調査・展示資料選定

この節では、北溟寮での3回の調査と北溟寮に関する展示資料の選定について記述していく。

平成28年度末に閉寮した北溟寮における調査を平成29年5月18日、25日、30日と3回に分けて行った。閉寮後2ヶ月経過した寮内は、大学側による清掃作業が行われ片付いている部分もあったが、大半はそのままの状態に残されており、北溟寮の活気や賑わいを垣間見ることができた。調査は希望者参加制であったが、各回5名程度参加し資料収集、写真撮影、動画撮影などを行った。

第1回の調査では、谷川竜一先生にも同行いただき、建物内部の写真撮影について指導を受けながら展示の導入部分で使用した動画の撮影を行った。また、寮内に数多く残された寮祭で使用した看板やはっぴなどの資料や、寮生OBが寄贈した物品などを回収した。

第2回の調査では、寮内に残された4階建て3棟の北溟寮内を隈なく見て回り、展示資料となりえそうな物品を回収した。またこの際、寮内の壁に寮生が描いた落書きの写真撮影も同時に行い、実習生全体で共有した。

第3回の調査では、前回の調査を行った際に注目していた、辞寮詩の書かれた扉や柵の扉など大型の資料を回収した。また、掲示板に残された寮内の新聞や寮運営に関する文書なども収集した。

7月頃に収集した資料の清掃と燻蒸を行い、渉外班が主体となって物質資料と文書資料に分けて資料整理を行い、資料リストを作成した。夏休み期間中に、決定した4つトピックに沿った資料を選定した。どのトピックもバランスよく資料を選定することができ、資料選定という観点については問題なく進めることができた。しかし、文書資料の多くには展示に適さない表現が多数散見されたため、文書資料の読み込みも含め展示に使用する文書資料およびページの選定に手間取った。

また、北溟寮内の様子や閉寮時の賑わいを来館者に感じ取ってもらう目的で、導入部分に北溟寮の壁に書かれていた落書きを再現することになった。それに伴いデザイン班主体で7月頃に落書きの再調査と撮影が行われた。この調査では、閉寮時に書かれたであろう「終わり」を表すものが主となり写真撮影が行われた。

## (3) 三々塾・時習寮展示資料選定

この節では、三々塾と時習寮に関する資料選定の様子について記述していく。

前述の通り金沢大学資料館、金沢大学図書館ともに寮に関する資料を多数所蔵しており、展示資料選定、トピック決定ともに苦労した。膨大な資料の中でどのようなトピックで展示を行うのか決めるため、3つの寮についての初期調査を行う一方で、平行して実習生全員での三々塾誌の翻刻と読み込みを行った。翻刻作業は日本史研究室の学生に協力を仰ぎ、より正確な翻刻を行うように配慮した。また、金沢大学図書館所蔵の寮に関する文献も膨大であったため、6月に文書資料の簡単な読み込みと概要の作成を実施。実習生全体に概要を共有し、興味深い行事や風習を扱う文献など今後より詳しい調査を行う文書資料を選出し、展示における仮の8つのトピック（1規則、2自治、

3図面、4イベント、5寮歌、6歴史、7思い・考えなど、8日常生活・慣習)を決定した。その後、仮トピックに沿って文書資料の読み込みと分類を資料班、展示班、キャプション班の3班合同で行い、調査結果に基づく話し合いや石川四高記念文化交流館との差別化、北溟寮閉寮に合わせた展示であることを考慮し、前述の4つのトピック(1終わり、2自治・規則・日常、3独自文化、4祭り)に決定した。

7月初めからは本格的に展示資料の選定を行った。まず金沢大学資料館が持っている資料リストから寮に関する資料をピックアップし、“展示資料候補リスト”を作成した。その後、展示資料候補を直接見て、保存状態、大きさ、公開可能な内容かなど展示に適した資料か確認を行った。展示資料の大枠が決まった段階で、展示資料リストを全体で共有し問題点を洗い出した。主な問題点として、文書資料が多く目を引く資料が少ないこと、「自治・規則・日常」に属する資料が少なく3つのトピックにおける資料配分のバランスが悪いことが挙げられた。そこでもう一度、展示資料候補リストや資料館の資料リスト、図書館所蔵の寮関係文書資料を振り返り、新たに寮務日誌、寮委員日誌、「田山方南書『第四高等学校時習寮南寮寮歌』」などの資料を加え、11月上旬に展示資料が最終決定した。

また10月頃に、文書資料において展示で使用するページを決定した。この際、資料の内容をよく表すページであること、来館者にも読みやすいことの2点を考慮しページを選定した。同時期にBGMとして寮歌を展示室内に流すことが決定し、寮歌を収録したCDやテープレコーダーの内、「CD四高110祭 四高寮歌集」を使用することが決まった。また、前述のCDの内、時習寮南寮寮歌が田山方南書『第四高等学校時習寮南寮寮歌』と対応することから、この曲の再現バージョンと合唱団バージョンの両方を流すことにした。

また、時習寮の壁などに実際に書かれていた落書きを書き留めた資料が見つかり、それをもとに時習寮内の落書きを再現し、北溟寮落書きの向いに展示した。

#### (4) 評価

今回の企画展においては、“平成28年度の北溟寮閉寮に伴い、金沢大学における寮の歴史を振り返る”というテーマのもと資料選定を行った。しかし、実習生の多くが寮についての知識がなかったこと、資料館や図書館に所蔵されている寮に関する資料が膨大であったことなどから、展示の核となるトピックを決定することに大変苦労した。

まず、寮に関する知識不足という点において、実習生全体で三々塾誌の読み込みを行い、当時の寮生の暮らしについての見識を共有することができた。しかし、金沢大学における寮の概観や歴史、発足の経緯などの細かい知識は、一部の実習生が調査を行ったのみであり、効率よく調査を進めることができなかった。キャプション班や展示班など、資料班以外に展示資料に深く関わる班の実習生と共に調査を行うべきであった。

次に、該当する資料数の多さという点において、早くに展示資料選定を開始したにも関わらず、トピック決定および展示資料決定までに大変時間がかかってしまった。前述の問題点と関連するが、資料館・図書館所蔵の寮に関する文書資料の読み込みを、資料班のみで行っていたことが問題であったと考えられる。調査半ば以降、キャプション班や展示班と共に調査を進めたが、より初期の段階から3班合同での調査を行った方が、情報の共有や効率のよい作業ができたと思う。

以上のことから、該当資料が多数存在しテーマの範囲が広い場合は、キャプション班や展示班など展示資料に関わりの深い班と共に、テーマの概略の調査、所蔵資料の調査、文書資料の読み込み

学生による企画展の報告「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」

などに手分けして作業を行うことで効率よく作業を進めることができる。また展示班にとっても、実際の資料を目の当たりにすることができ、展示構成を考える上で参考になりやすい。キャプション班にとっても、資料調査を自ら行うことによって、より深い見識が得られ内容の濃いキャプションを作ることができる。

(鈴木)

トピック	資料番号	資料名	備考	ケース番号	ページ指定	キャプション班向け 配置要録1枚/1枚 イーゼル
終わり	26	扉	2枚	1	A	
終わり	27	退寮鬼ごっこ告知		2	B	
終わり	四高674	南寮3号室録		3	B	○
終わり	図書館収蔵144	時習寮報38号(去寮特集)		4	B	
終わり	四高678	三々塾誌③		5	B	○
自治・規則・日常	四高117	学生服上着(冬用)		6	C	
自治・規則・日常	四高118	学生服ズボン(冬用)		7	C	
自治・規則・日常	四高119	制服		8	C	
自治・規則・日常	四高110	マット		9	C	
自治・規則・日常	四高124	下駄		10	C	
自治・規則・日常	図書館収蔵145	寮務日誌		11	D	○
自治・規則・日常	図書館収蔵145	寮委員日誌		12	D	○
自治・規則・日常	四高個人寄贈資料000-01-090-208	CHOZEN-RYO KINENSAI 1925.OCT THE 4TH HIGH SCHOOL(JISHURYO 記念祭 1925)		13	E	
自治・規則・日常	文書192	ハンコ		14	E	
自治・規則・日常	四高511	北辰手帳		15	E	○
自治・規則・日常	四高385	明治45年三々塾生の写真		16	F	
自治・規則・日常	四高373	三々塾生の写真		16	F	
自治・規則・日常	第四高等学校写真000-01-626-55	南寮2号窓辺にて		17	F	
自治・規則・日常	41	当直箱		18		
独自文化	39	拵		19	G	
独自文化	文書182	寮祭記念寮歌ボード		20	G	
独自文化	文書183	寮祭記念寮歌ボード		21	G	
独自文化	文書184	寮祭記念寮歌ボード		22	G	
独自文化	文書35	運動会北冥美塾	放送禁止用語 多用	23	H	
独自文化	四高580	怪談台本(中寮2号)		24	H	
独自文化	720-01-090-191	田山方南書『第四高等学校時習 寮南寮寮歌』(時習寮歌、題入り 書)	75x60	25		イーゼル
独自文化	四高個人寄贈資料760-01-090-26	CD四高110寮 四高寮歌集	音を流す	26		
祭り	四高238	太鼓		27	I	
祭り	四高239	太鼓台		28	I	
祭り	四高111	紺袴(複製)		29	J	
祭り	四高116	黒紋付羽織		30	J	
祭り	文書67	寮祭ノート(2012、2013年)	各1冊	31	K	○
祭り	文書139	金大三寮祭パンフレット		32	K	
祭り	文書150	フィナーレ革命		33	K	
祭り	四高675	南寮3号室録	ストームにつ いて記載あり	34	K	○
祭り	22	手作り看板(最強の豚)		35		
祭り	33	はっぴ	複製	36		
マッピング		食ベログ		37		○

※ページ指定したものは、展示班ライブ内の「展示ページ写真」に写真があります。

図1 展示資料リスト



図2 第二回北冥寮調査の様子



図3 第一回北溟寮調査で回収した資料



図4 北溟寮の壁の落書き（一部）

#### 4. 展示室の構成と展示作業について

本章では、展示室の構成と展示の意図、設営作業についてまとめる。

展示は、①寮の終わり、②自治・規則・日常、③独自文化、④寮祭の4つのトピックを設け、セクション分けをおこなった（図1）。また、来館者参加型の展示として、マッピングのセクションも設けた。各セクションでは、三々塾・時習寮・北溟寮の資料を取り上げ、金沢大学の学生寮について紹介した。

以下、展示室の具体的な構成や展示作業について記述しつつ、問題点や成果を示したうえで事後評価を行う。

##### (1) 展示室の構成内容

展示室は、寮の終わりからさかのぼり、各トピックについて紹介する構成とした。4つのトピックを一連のストーリーに沿って順に紹介するというよりも、並列的に示すことを重視し、最初に「寮の終わり」セクションを通過する以外は特に順路を設定しなかった。

まず「寮の終わり」セクションでは、北溟寮の去寮に際して寮生が詩を書き残した扉（「辞寮詩の扉」）を、展示の入口に配置した。また、展示室全体に聞こえるよう、寮歌を流した。これらによって、来館者の興味を引くと同時に、来館者が学生寮の世界へ入り込むような雰囲気 연출した。また、調査の時点で、寮生たちが寮の壁や扉に書き残した落書きが多数見られた。寮の雰囲気を感じてもらおうと同時に、寮生たちの寮に対する思いを知ってもらうために、壁とパーテーションに彼らの落書きを再現した（図6）。

「寮の終わり」セクションを抜けた奥のスペースは、「自治・規則・日常」、「独自文化」、「寮祭」、マッピングの4つにセクションを分けた。このスペースでは、中央に各トピックの目玉となる資料を1点ずつ集め、その周りに関連資料を配置した。目玉資料を中央に集めて配置することにより、各トピックに対する来館者の関心を高める効果をねらった。展示資料は全体的に文字資料が多かったが、当時の学生の服装をマネキンに着せて示したり、寮祭の様子を太鼓や衣服などのモノ資料で再現したりして、視覚的に示す工夫をした。

4つのトピックとは別にマッピングのセクションを設けた（図7）。ここでは、各寮の関連資料から寮生が通っていた飲食店を選出して市内の地図上に場所を示し、エピソードとともに紹介した。

さらに、来館者自身の行きつけの飲食店やエピソードを書いてもらう仕組みも用意した。来館者が「遊び場」という身近なテーマで自身と寮生を比較することによって、より寮生に親しみを持ってもらう効果を期待した。

また、このセクションは展示全体の間地点にあたるため、中休みの意味も兼ねている。ここを来館者参加型の展示とすることで、展示に飽きさせない工夫をした。

展示パネルは、知られざる寮生活の様子を紹介する意味を込めて、辞書風のデザインで統一した。より展示に親しみを持ってもらうために、案内役として、三々塾・時習寮・北溟寮を擬人化したキャラクターを登場させた（図8）。各トピックの解説パネルは、3人のキャラクターが登場する漫画によって展示の内容を紹介した。

展示の最後にはipadを設置し、各寮にまつわるエピソードをTwitter風に流した。ここでは、3人のキャラクターがつぶやく形でエピソードを紹介している。これによって、展示では紹介しきれなかった寮生たちの思いを知ってもらうことを目的とした。

展示室入ってすぐ左手のガラスケースの中には、北溟寮調査の成果を示す形で、調査にて収集したさまざまな資料を展示した。

## (2) 展示室の設営

展示室の設営作業は、授業等の空き時間を利用し、3日間にわたっておこなわれた。設営初日に、展示班の学生を中心として、什器の配置と翌日以降に搬入する資料をまとめる作業をおこなっていたため、搬入はスムーズに進んだ。

辞寮詩の扉は、建築学を専門とする教員の指導のもと、転倒防止のために下部をコンクリートブロックで挟み、針金を巻いて固定した。コンクリートブロックの目隠しには、北溟寮の調査にて収集した来客用スリッパを使用した（図9）。

実際に資料を配置したところ、図面上の計画では見えなかった問題点がいくつか浮上した。特に、展示ケース内に資料を配置すると、来館者の目から見づらくなってしまふが多かった。この問題に対応するため、全体の様子を見ながら展示小物を作成した。「寮歌ボード」は中性紙の段ボールを利用して写真立てを作り、そこに入れた。高さの低い展示ケース内に展示した平面資料は、見えやすいよう、箱を作って資料の下に入れ、底上げすることで対応した。

## (3) 評価

本展覧会は、旧北溟寮の閉寮に際し、金沢大学の学生寮の歴史と寮生活の様子を振り返ることをコンセプトとした。展示では4つのトピックを設定し、それを並列的に提示することにより、寮生活の多様な面を、まとまりを持って示すことに成功した。また、展示を構成する4つのトピックのうち、「寮の終わり」を最初に持ってくることによって、閉寮の寂寥とした雰囲気から、活気に満ちた寮生活の世界へとタイムスリップするような効果を演出することができた。

展示解説では、各寮を擬人化したキャラクターを登場させ、わかりやすくかつ親しみやすい解説の工夫がなされていた。特に、展示パネルに漫画を取り入れた例は過去になく、展示に興味を持ってもらうための新たな試みであったといえよう。また、マッピングやipadを用いたエピソード紹介といった来館者参加型の展示を取り入れたことにより、来館者を展示に引き込む効果が発揮できた。これらの工夫によって、寮生活の様子を生き生きと伝えることができるような展示を目指した。

その一方で、展示に一連のストーリーを設けていなかったことにより、トピックどうしのつなが

りを示しづらかった。また、目玉となる資料のほとんどは北溟寮のものであった。このため、金沢大学の学生寮として三々塾と時習寮も取り上げていたにもかかわらず、これらの資料の存在感が北溟寮の資料に比べて薄れてしまった可能性がある。

設営作業では、図面で計画していたものを実際の空間で配置してみて初めて発覚する問題も多々あった。特に、展示ケース内に配置した時の見え方や通路の確保などは、現場で作業をしながら議論となった点である。しかし、展示小物を作成したり、展示ケースの配置を調整したりと、設営作業に参加していた学生が意見を出し合い、臨機応変に対処することができた。これらに費やす時間も考慮し、余裕をもった日程の確保が求められる。また、なるべく早く展示室や展示ケースを実見し、より具体的なイメージを持ったうえで展示構成に関する議論を行うことが望ましい。

(米田)

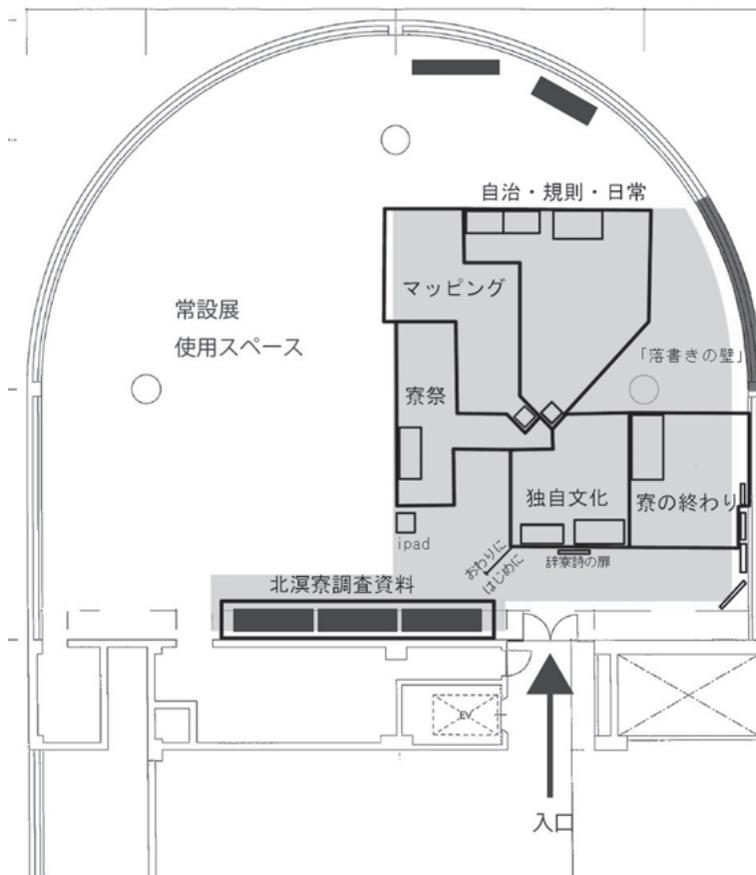


図5 展示室の構成

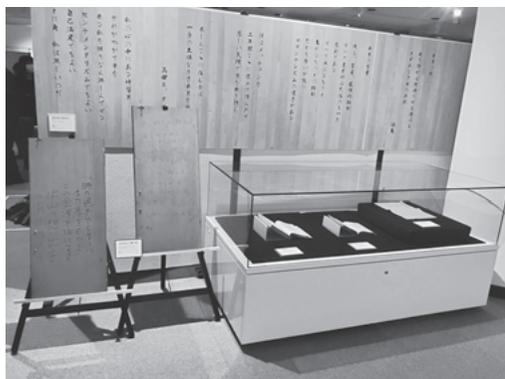


図6 「落書きの壁」



図7 マッピング



図8 展示パネルと案内役のキャラクターイラスト：岩下彩香、田村美由紀  
デザイン：清原永吏、野村菜月、玉崎藍子

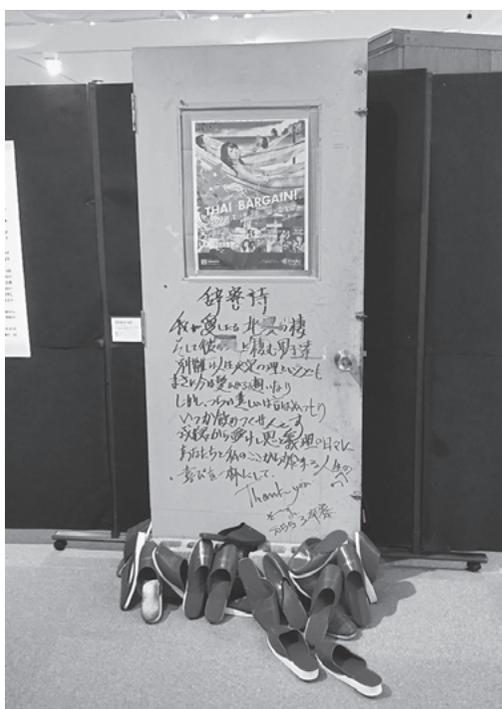


図9 「辞寮詩の扉」

## 5. 教育普及活動等の実施について

本章では教育普及活動と各種イベントの企画について述べる。2017年度実習では、「メタモル寮生ツアー」および「ミーツ寮生ツアー」と冠したミュージアム・ツアー、「怪談絵」と称したワークショップを企画した。またテレビや新聞などの取材も受け入れた。

### (1) ミュージアム・ツアーのコンセプト決定

この節では、ミュージアム・ツアーのコンセプト決定にいたる経緯について記述する。

そもそも展覧会テーマ決定の段階から、教育普及活動としてミュージアム・ツアーを行うことは、全会一致で決定していたことであった。しかし、ミュージアム・ツアー自体のコンセプトが決定しておらず、紹介する資料の選定ができない状態であった。そのため、資料班が主体となって、ミュージアム・ツアー自体のコンセプトを決める必要に迫られた。

まず、ミュージアム・ツアーのターゲットとする客層を設定した。本展覧会が寮に関する展覧会であること、学生の暮らしという点に興味を持ってもらいやすい展覧会であることから、金沢大学学生、教職員のほか寮生OBも来館することが予想された。また前年度までのミュージアム・ツアー参加者の傾向を加えると、彼らは寮や美術教育に関して一定の知識を持つ来館者と、寮や美術教育について全く知識を持たない来館者の2パターンに分けることができると考えた。そのため、あえて2種類のミュージアム・ツアーを設けることで、来館者が自分の興味やレベルにあったものを自由に選択できるようにした。

次に、それぞれの客層にあったコンセプトを決定した。寮や美術教育に関して一定の知識や関心のある来館者は、より深く展覧会のことを理解しようとする。そのため展覧会のキャプション以上の情報を求めると考え、実習生から一方的に情報を与えるだけでなく、参加者からの質問や意見を求める時間を多く設定した。寮や美術教育について全く知識を持たない来館者には、ミュージアム・ツアーが展覧会に訪れるきっかけとなるような企画を考え、展示自体を楽しんでもらうことを目標に設定した。

### (2) メタモル寮生ツアー

メタモル寮生ツアーは寮や美術教育について知識を持たない客層をターゲットとして想定し、寮についての知識が無くともわかりやすくする為に内容を詰め込みすぎずそれぞれの寮の違いや共通点を中心に展示を解説した。学生三人が北溟寮、時習寮、ナレーターの担当に分かれて参加者を案内し、「自治規則」、「寮祭」、「独自文化」についての展示を参加者とともに説明しながら回った。

ツアーが終了した後は参加者に楽しんでもらうことと話題になることを目的として、参加者に着用可能な資料を着て昔の寮生になりきっての写真撮影を勧めた。また、飲食店や観光地などで流行していたインスタグラム風のフレームをデザイン班が作成しこれを用いた写真撮影も取り入れた。

### (3) ミーツ寮生ツアー

ミーツ寮生ツアーは寮生OBなど寮について詳しい客層もターゲットにしているミュージアム・ツアーである。ミュージアム・ツアーの案内役として展示パネルの漫画に登場した三々塾のキャラクターであるサンサン先輩、時習寮のキャラクターであるジシュー先輩、北溟寮のキャラクターであるホクメイ君に学生が扮して登場した。その際、昔の寮生の服装を再現するために着用可能な資

料からサンサン先輩役の人は紋付羽織（複製）、紺袴（複製）を着用し、ジシュー先輩役の人は学生服上着（冬用）（複製）、学生服ズボン（冬用）（複製）、制帽、マント（複製）、トンビコートの中からいくつか選んで着用した。

ミーツ寮生ツアーでは展示内容の中から各回違う一つのテーマについてキャラクター同士の会話形式で解説した。1月15日に「祭り・独自文化篇」、1月24日に「自治篇」、1月26日に「寮の終わり篇」を行った。「祭り・独自文化篇」ではホクメイ君とジシュー先輩、「自治篇」ではジシュー先輩とサンサン先輩、「寮の終わり篇」ではホクメイ君とジシュー先輩が案内役となり、それぞれの回に1人ナビゲーター役が付いて三人で案内役を務めた。

会話の中で三々塾と時習寮のライバルのような関係性を表すなどの工夫をした。



図10 ミーツ寮生ツアーの様子

表3. ミュージアムツアースケジュール

日程	内容
1/15	ミーツ寮生ツアー 祭り・独自文化篇
1/16	メタモル寮生ツアー
1/17	メタモル寮生ツアー
1/24	ミーツ寮生ツアー 自治篇
1/25	メタモル寮生ツアー
1/26	ミーツ寮生ツアー 寮の終わり篇

表4. 着用可能な資料一覧

資料番号	資料名
000-01-090-200	トンビコート
四高110	マント（複製）
四高111	紺袴（複製）
四高112	紋付羽織（複製）
四高117	学生服上着（冬用）（複製）
四高118	学生服ズボン（冬用）（複製）
北溟寮資料	はっぴ（ピンク）
北溟寮資料	はっぴ（オレンジ）
北溟寮資料	はっぴ（黄緑）

### (3) 怪談会

資料館外で行う関連イベントとして、「怪談会」を行った。第四高等学校の学生が寄宿していた時習寮では先輩から後輩へ語り継がれる怪談があり、入寮三日目の夜に「怪談会」と呼ばれる催しで披露されていた。今回の学生企画展では、この怪談が記された台本の1頁を展示している。展示

資料をより深く学ぶことを目的とした派生型、企画展主題である寮生活の一部を再現し鑑賞者に同じ体験を提供する体験型の教育普及活動として実施を決定した。会期直前は展示班、キャプション班、デザイン班が多忙になり、資料班がミュージアム・ツアーを担当したため、怪談会は渉外班6名が実行を担当した。

準備活動では、まず『北辰詞華集』に納められた複数の怪談の中から本番で使用するものを選別し、朗読時間約9分の『北寮三号にまつわる怪談』に決定した。朗読係、司会進行係、視聴覚資料係のそれぞれ2名ずつに分かれ、何度も予行練習を重ねた。朗読係を先輩寮生、参加者を新入寮生と仮定して、臨場感を出すために様々な工夫をした。朗読係は資料館に収蔵されている外套と学生帽に身を包んだり、視聴覚係は朗読の進行に合わせて変化する映像と音楽や効果音を組み合わせた資料を作成したり、照明には蝋燭の明かりを模したLED照明を使用するなどした。加えて、イベント開催の背景や目的、会談中に登場する特有の用語などを解説した冊子を「入寮のしおり」として当日の参加者に配布した。

実際に怪談会のイベントを開催したのは2018年1月16日（火）と1月18日（木）のいずれも午後であったが、これとは別に2017年12月21日（木）5限の博物館教育論の教室でもデモンストレーションを行なった。博物館教育論は学芸員資格取得科目の1つであり、後に博物館実習に取り組み同じように学生企画展を製作する学生が主に受講している。この怪談会を企画する際に見込まれる参加者層の一部として博物館科目の履修生を想定していたのだが、授業の一環として先に教室で披露してしまい、さらに、怪談も先述した1話のみを2回使用する予定で他にバリエーションを設けていなかったため、第1回目の怪談会の参加者は数名に止まってしまった。これを受けて、2日後の第2回に向けて何か追加の宣伝活動を行うことを決定した。即席で用意できるものとしてパネル2枚を紐で繋ぎ、胴の前面と背面に装着できる看板を資料館学芸員が製作し、本番の朗読係と同じ寮生に扮した学生がこの看板を身につけて開催当日の大学内を練り歩いた。普段の大学構内では目にしない光景に困惑されながらも注目を浴び、第2回は10名が参加した。この日は年配の男性2名が見え、終了後に連れ立って学生企画展を観覧する姿があった。感想カードにかつて寮生であったこと、昔を懐かしんだことが記されており、開催した学生としては喜ばしい来客となった。

#### (4) 取材

今回の学生企画展に関して対応した取材は、以下に列挙する通りである。会期初日の11月29日にHAB北陸朝日放送の『スーパーJチャンネル』（11月30日放送）、『北國新聞』（11月30日掲載）、11月30日に『北陸中日新聞』（12月2日掲載）、12月8日に金沢大学広報室（12月12日金沢大学の公式Facebookに投稿）の取材に対応した。メディア取材以外では、美術館・博物館のポスターを掲示することで生徒への啓発活動を行なっている岐阜県立加茂高等学校から学生企画展のポスターとチラシ、合わせて資料館のリーフレット送付の依頼があった。他にも、12月27日に滋賀県立虎姫高等学校の生徒120名、会期最終日の3月16日には北浜寮OB一行の見学依頼があった。北浜寮OBは1970年～85年ごろに在寮していた寮生を中心に10数名が来館し、展示資料と企画展のポスターにも使用した扉の辞寮の詩を書いた本人とも面会することができた。

(北澤・室谷・鈴木)

## 6. 学生展への大学資料館の関わり

資料館では学生企画展を2014（平成26）年度から毎年開催するようになり、2018年で5年目となる。本報告のテーマとなっている2017年の学生企画展は4回目であった。2017年の学生企画展はそれまでのものに比べると非常に例外的なコンセプトで企画されたとと言える。学生企画展では、館蔵資料（学内の他機関が所管する資料・作品は借用手続きをした上で使用可）を使うという条件（小口2018）から、2014年は植物及び菌類に関する教育掛図（学内他機関）・標本資料（資料館蔵）を展示した「植物図館<sup>ii</sup>」。2015年は第四高等学校の校風改革運動に関連する“寒潮事件”について文書及び写真（資料館蔵）を展示した「破かれた恋愛小説」、2016年には第四高等学校由来の物理実験機器（資料館蔵）を文系学生の視点で紹介する「ハカリモノ」を開催してきた。今回も館蔵資料を使用することは条件であったが、学生の生活をテーマにするという初期のコンセプトと北溟寮の閉寮という大学史における重要な出来事をもとに企画されたことで、館蔵資料の紹介というよりは、大学正史ではない寮史の検証と「時事ネタ」を融合させた形となり、学生企画展の歴史の中では新たな形式が生まれたと言える。

学生企画展の構想・企画から展示準備に至るまでは報告書に基づき詳細に述べているが、まずここでは企画の前段階で資料館として北溟寮に関わった経緯を紹介したい。平成28年に北溟寮の閉寮が決定し、平成29年3月末日をもって全ての寮生が退寮することになった。大学の学生寮は事務局の学生部が所掌しており、閉寮前から建物の取り壊しに際して学生個人の持ちもの以外で保存すべきものがあるかについて調査を行っていた。この中で、寮OBらが寄贈し、かつ銘が入っているものを中心に学生部がピックアップし、資料館収蔵予定として物品に印をつけた。資料館長はじめ教職員は平成28年12月19日に現地調査に赴き、学生部が印をつけた物品を確認、それ以外でも収蔵する可能性があるものを探した。この結果、寄贈品である銘の入った柱時計、臼及び杵、といった物品を回収した。こうした中、博物館実習が4月に開始し、学生らがテーマを探す段階で四高における学生生活を紹介するといったコンセプトが固まり始める。当初、金大生（金沢大学学生）の衣食住、部活動、寮生活といった三つのコンセプトが上がったが、最終的には寮生活に落ち着く。資料館職員は授業での話し合いについて学生が作成した詳細な記録を定期的に見ていたため、この寮生活というコンセプトに北溟寮の閉寮を追加できないかという提案を行ったと記憶している。

北溟寮の資料は展覧会準備の段階では資料館への移管手続きがなされていなかったが、資料館収蔵予定資料として展示に組み込むことが決まっていく。博物館的な手続きの話になるが、これら北溟寮関係資料は寄贈ではなく、学生寮を所管する学生部から資料館へ学内移管されることになる。寮の建物自体の取り壊しが平成30年までに行われることを受け、資料館職員を中心に学生も加わり、北溟寮関係資料の搬出作業を行った。また、展覧会準備の段階では移管前なので、収蔵庫に入れることはできないものの、展示を前提としているため、燻蒸作業を行った。資料館では大学の夏季休業中に、それまで寄贈・移管を受けた資料を附属図書館の貴重書等とともにガス燻蒸しているので、この機会に北溟寮資料も全て燻蒸した。燻蒸作業同日には業者の許可を得て、保存科学に興味のある実習生が見学をした。燻蒸が終わった資料は展示準備室（収蔵庫併設の作業室）に運び込み、展示のための資料整理を学生自らが行った。ちなみに、この時点ではどの資料を資料館に移管するかは決まっていなかった。

結果的に、北溟寮のフィールドワーク、資料館所蔵の四高時代の資料調査、学内移管を想定した北溟寮関係資料の搬出作業、同資料の燻蒸・資料整理、展示作業と、博物館実習の枠を超えるよう

な内容となった。作業量は膨大であったが、本課題に取り組んだ実習生の人数も過去最大の30名だったため、会期直前にすべての準備が整い、無事、開館した。展示準備の段階では多くの困難があったが、実習生は例年のないほどの幅広い学芸員業務を経験したと言える。学生主導でさまざまな課題が生まれ、展示内容が充実していき、アクティブ・ラーニングならではの効果が発揮されたことも大きな成果ではないだろうか。

(笠原)

## 注

- i 笠原健司「金沢大学資料館における博物館実習の取り組み」『金沢大学資料館紀要 No.11』2016年3月、金沢大学資料館、55-56頁。
- ii 同論文57頁。
- iii 学生企画展の意図については、以下を参照。有村 誠「金沢大学資料館の学芸員養成プログラムにおける取り組み-大学博物館の原風景-」『金沢大学資料館紀要 No. 10』2015年、金沢大学資料館、27-36頁。
- iv 2015年の学生企画展「破かれた恋愛小説」は、2018年に石川近代文学館からの依頼で同館の企画展「学校のある風景～学都金沢の青春小説～」の一部に展示協力という形で再度展示された。(会期：2018年1月6日～3月11日)
- v 金沢大学資料館アウトリーチ展「バンカラ寮生類～金大寮史125年～」は金沢市内の石川四高記念文化交流館・多目的利用室1にて開催された。(会期：2019年1月18日～2月17日)
- vi 「図鑑」ではなく、植物及び菌類に関する「図」版を資料「館」で展示するという意味合いで「図館」とした。